

東亜同文書院の伝統的中国語教授法「念書」とその 戦後における継承

中里見, 敬
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/6770647>

出版情報 : The Bulletin of China Studie. 22, pp.73-93, 2023-02-25. 霞山会
バージョン :
権利関係 :

研究ノート

東亜同文書院の伝統的中国語教授法「念書」と
その戦後における継承

中里見 敬

初稿受付 2022年 8月 29日

査読通過 2022年 10月 17日

1901年東亜同文会が上海で開校し、1945年の敗戦により閉校となった東亜同文書院に関する研究は、近年飛躍的な進展を見せており、旧来の東亜同文書院に対する認識は一新されたといっても過言ではない。例えば、書院生の「大旅行」を長年研究してきた藤田佳久氏は、東亜同文書院を「日本初のビジネススクール」、「そのグローバル性から見れば、世界初のビジネススクールだともいえる」と評し、その教育の特徴を以下の3点にまとめている¹。

1. 中間業者（買弁）抜きで取引のできる徹底的な現地語（ここでは清国語）と英語の習得をはかったこと。
2. 貿易品の探索のための脚のみの踏査旅行を5～6人平均のグループで3ヶ月あまり実施し、中国本土だけでなく、東南アジアや満洲にも及ぶ700コースにもものぼる大旅行を行い、それらの膨大な記録を残したこと。
3. 座学では貿易システムの慣行から商取引慣習、さらに会計まで幅広く学修し、しかも基礎科目も設け、貿易人としての養成をはかったこと。

東亜同文書院の中国語教育について見ると、愛知大学の今泉潤太郎氏および石田卓生氏によってすでに全面的な研究が行われている²。個別的には書院で長年にわたって改訂、使用され続けた教科書『華語萃編』に関する研究³、当時の試験問題からそのレベルの高さを明らかにした研究⁴、東亜同文書院が刊行した雑誌『華語月刊』の分析をとおして書院の中国語研究を論じたもの⁵、等々枚挙に暇がない。これら近年の研究成果と、六角恒廣氏による先駆的研究を併読することで⁶、東亜同文書院における中国語教育の全体像を理解することが可能になっている。

ところで、書院卒業生の回想録で頻繁に言及される「念書」、すなわち上級生が新入生に中国語の発音指導を行う課外の活動については、東亜同文書院の名物「書院カラス」として関連書籍の多くが取り上

¹ 藤田佳久 2020、1～2頁。

² 今泉潤太郎 1995、石田卓生 2019。後者の第3部「東亜同文書院の中国語教育」は書院で使用された教科書を詳細に分析したうえで、近代日本の中国語教育という歴史的文脈の中で書院の中国語教育を位置づける。

³ 主なものに、松田かの子 2001、今泉潤太郎 2007、紅粉芳恵 2010など。

⁴ 今泉潤太郎 2007、石田卓生 2010。宮田一郎 2016、201頁も参照。

⁵ 松田かの子 2005。

⁶ 六角恒廣 1984、1986、1988。とくに六角 1988の「IV編 第三章 東亜同文書院」313～374頁。

げている。一例を挙げよう。

寮の朝は、自習室の掃除から始まる。それが終わると、院子(校庭)に出て、先輩による中国語の発音練習である。(中略)まず、中国語特有の四種類の抑揚、四声の練習から始まった。「アー、アアー、アアー、アア……」(中略)毎朝夕、百数十人の若者が同じように「アー」などと発音するのだから、当然近所にも聞こえる。これは春の風物詩のようになり、「アー、アー」がカラスの鳴き声のようであったため、中国人の間では、こう囁かれていたという。「また、今年も“書院カラス”が鳴き出した」この書院カラスにまつわる逸話は多い⁷。

この「念書」という指導法については、上述の先行研究においても多少言及されるものの、これまで正面から論じられることはなかったようである⁸。本稿では、卒業生の回想録などの史料に基づき、「念書」に焦点を当てて書院の中国語教育を考察し、さらにその戦後日本の大学における継承についても論じてみたい。回想録は末尾に一括して掲載し、本文では適宜引用、ないし典拠を()付きの番号で表示する。

1. 書院の中国語教育略史

東亜同文書院の中国語教育について、主な教員の在籍状況とともに概観しておく⁹。創立当初の書院は教員がそろわず、中国語の授業は三井洋行の御幡雅文に毎週日曜の出張授業を依頼し、「日曜は朝八時から正午まで、時には午後二時まで中食抜きでぶつ通しの講義、その時間に一週間分の授業をうけてしまうのである。学生は、これで日曜足止めとなつて閉口した」¹⁰という。1903年5月に着任した高橋正二は『北京官話声音譜』(東亜同文書院、1905年序)の凡例に、「発音法ハ初学者の苦シム所ニシテ茲ニ説明スルモ容易ニ首肯シ難カルベキヲ以テ之レヲ口授ニ譲ル」と述べるなど、初学者の発音指導に意を用いたようである¹¹。5期生の回想に「中国語の教授方法が改善せられて、やや科学的になつた」(3)というのは、このような状況を指しているのだろう。こうした中、早くも3期生の回想録に「書院鴉」が登場する(1)。書院草創期から「念書」の伝統は始まったようである。

書院2期生の真島次郎(1905年4月~06年12月、1910年9月~25年12月在任)が中国語教員として着任すると、その熱心な指導は多くの学生に強い印象を与えた(6,7,8,9,13,14)。東亜同文書院の中国語教育は真島以降、基本的に書院生え抜きの教員によって担われることとなる¹²。この時期は、書院の中国人教師と日本人教師が共同で『華語萃編』(1916年初版発行)を刊行するなど、中国語教育が充実

⁷ 西所正道 2001、31頁。ほかに、藤田佳久 2012は、『華語萃編』は北京官話を主にした丸暗記用のテキストで、(中略)上級生が下級生に口伝えて教えた。その発音練習がカラスの鳴き声のように響き、「カラス学校」といわれ、この伝統は愛知大学でも継承された(222頁)という。

⁸ 六角恒廣 1984は、「学生は全部寄宿舎に入っていたから、授業で先生から中国語を教授される以外に、寄宿舎でも上級生が下級生を教える、という特殊な教育法がなされていた」(99~100頁)という。

⁹ 本章の記述は、今泉潤太郎 1995 および石田卓生 2019に基づく。

¹⁰ 内藤熊喜「書院創立のころ(第一期生の想出)」、『東亜同文書院大学史』1955、168~169頁。

¹¹ 石田卓生 2019の第2部第1章、第3部第2章参照。

¹² 書院出身者以外では北京同学会出身の影山巍が約15年勤めたが、突然解雇されたという。影山巍 1970参照。上尾龍介 1982は、影山巍と鈴木樺郎は「両雄並び立たず」の関係であったという(16頁)。

していき段階といえる。14期生が「同県の先輩諸兄から四声をくりかえしくりかえし大声を出しながら教わった」(8)と記すように、同郷の2年生が新入生を教える「念書」の伝統がはっきりと形づくられたことがうかがわれる。

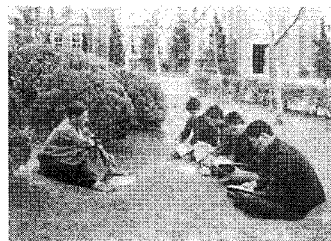
1925年12月に真島次郎が41歳で早世すると、書院の中国語教育は鈴木擇郎(15期)ら若手教員によって担われるようになる。1920年の鈴木採用を皮切りに、17期の熊野正平、18期の野崎駿平、20期の坂本一郎ら書院卒業生が次々に着任し、1945年の閉校まで書院の中国語教育を支えた。教育に加えて、研究も盛んになるのがこの時期である。東亜同文書院では、1918年に支那研究部が設置され、1920年に『支那研究』、1928年には『華語月刊』が創刊され、学術研究の体制も整備された。『華語月刊』には音声、文法、方言、中国語教育などの学術論文、学習者向けの読み物、書院の試験問題と模範解答などが掲載されている。こうした研究が中国語教育にも還元されることで、「有るものはただ素材としての会話を漢字で記録した教科書ばかり」¹³と酷評された状態から、「言語学的アプローチの欠如という問題は、昭和期に入ると解決されつつあった」といわれるまでに進化した¹⁴。教育研究両面の充実を承けて、東亜同文書院は設立当初の私塾(3年制)から、1921年には専門学校令による正規の高等専門学校(4年制)に、さらに1939年には大学(予科2年、学部3年制)へと昇格した。

2. 書院卒業生の回想録から見た「念書」

回想記の分析により、「念書」について確認できたことをまとめると、以下のようになる。

(ア) 「念書」の形態

書院設立の初期から末期まで、一貫して「念書」は行われた。毎日朝夕1時間ずつ(17,19,20,28,29,34)、あるいは2時間(24,33)、入学から夏休み前まで(17,20)、あるいは1年間行われたという記述もある(2,29)。写真のように数名の新入生を教えることが多いが、マンツーマンということもあった(28)。



『東亜同文書院大学史』1982年版、548頁より

(イ) 「念書」の内容

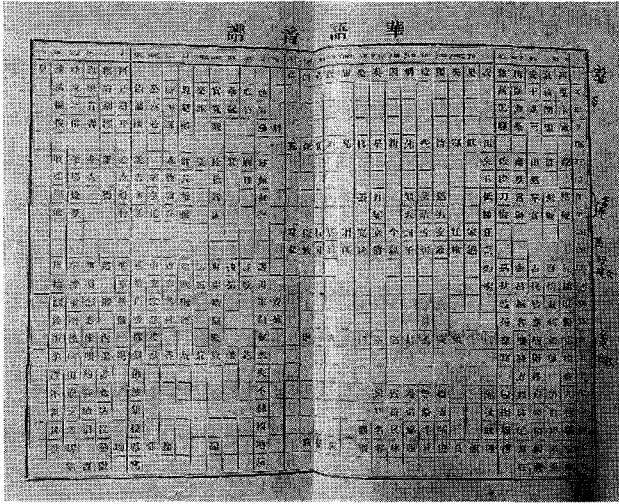
「念書」の内容は、「(華語萃編)というテキストについて毎日平均百回位その日又は前日学んだ所を読む」という猛烈なものであった(12)。なかでも声調の習得に重点が置かれていた(19)。『華語萃編』には現在の音節表に相当する「華語音譜」に次いで、「華語声音編」が15頁にわたって続く。これは1つの音節に対して4種類の声調に対応する漢字を掲出した字音表であり、以下のようなものである(○印

¹³ 魚返善雄 1958、2頁。魚返は1926年入学、病気で留年し27期生中退。

¹⁴ 石田卓生 2019、454頁。松田かの子 2005も「東亜同文書院の中国語教育は、当時なりに客観性・科学性を持った言語学研究の上に行われていた」(157頁)と評価する。

は、その声調の文字がない)。

a 啊啊啊啊 ai 哀埃矮愛 an 安○俺按 ang 腌昂○盎 ao 熬熬襖傲
(中略) ka 嘎嘎嘎○ k'a 卡○卡○ kai 該○改概 k'ai 開○概○ (以下略)



「華語音譜」、『華語萃編』1921年4版による

ゼロ声母の次に日本語のカ行に相当する「嘎」(ピンインではga)「卡」(ka)が続くのは、「華語音譜」に「本書は邦人の了解に便なるべきを思ひて、母音を「アイウエオ」の順に依り横に列し、子音を「アカサタナ」の序に従ひ縦に排せり」というように、日本語五十音図の縦軸と横軸を入れ替えた独特の排列となっているためである。書院ガラスと呼ばれたり、「アーアー・カーカー」(20)と回想されたりしているのは、「華語音譜」「華語声

音編」の排列順に発音練習を行ったからだと考えられる。ゼロ声母(a)から舌根音(g, k)へと進むと、唇音(b, p)に比べて調音点がある子音で有気音の練習をすることとなり、初学者にとって負担が大きい。この点は、のちに『華語萃編』の改訂にあわせて「華語音譜」「華語声音編」も修正され、ゼロ声母の次には唇音が配置されることで改善された(以下の引用は1942年全訂版による)¹⁵。

a 啊啊啊啊 ai 哀埃矮愛 an 安○俺按 ang 腌昂○盎 ao 熬熬襖傲
(中略) pa 八拔把罷 p'a 琶爬○怕 pai 掰白百拜 p'ai 拍排排派 (以下略)

「華語声音編」が終わると、いよいよ本文が始まる。第一課「聞一知十」で数詞や加減乗除の表現を習い、第二課「散語問答」から問答体の会話文となる。17期生と30期生がともに記憶していた「你要那個。我要這個。」は、この「散語問答」の冒頭である(11,20)。「華語声音編」で併記されていたウェード式を改良したローマ字(のちに注音字母も)は、これ以降付されない。ただし『華語萃編』初集のみ、漢字の左下から順に付された圏点によって声調を示し、有気音には黒点が付してある。さらに、1930年訂正8版の改訂により「重念」を示す記号が付されるようになった¹⁶。第二課「散語問答 其一」の冒頭から引用すると以下のとおりである(圏点は省略)。実際には、本文は縦書き、右側に漢字「一」のような横棒(1942年全訂版では短い傍線)が振られているのが「重念」記号である。

你要那個。我要這個。這是你的麼。這不是我的。

最初の文は「那」の圏点が生肩に付いていることから第三声、現在の表記だと「你要哪個?」となる疑

¹⁵ 「華語音譜」「華語声音編」の改訂については、松田かの子2005、159頁、および石田卓生2019、381~388頁参照。

¹⁶ 石田卓生2019、385~386頁参照。

問文である。同様に第三文も疑問文。その返答「這不是我的」の「不」に「重念」記号が付されていることに注意したい。このように読むことで、きわめて自然な応答となる。かりに「我」を強く読むと、不自然であったり、異なるニュアンスになったりするだろう。

なお、「散語問答」は第2〜8課であったものが、1942年7月発行の全訂版では、第1課「聞一知十」が削除され、「基本散語」が第1〜18課と大幅に増えている¹⁷。上級生による指導「念書」は、「華語音譜」に始まり「散語問答」(のち「基本散語」)までを中心に、場合によっては夏休み前に学習する第9課「詢僕履歷」以降の課文でも実施されたようである。

(ウ) 「念書」に対する受け止め

書院生は「念書」に対して全般に肯定的であり、書院独特の伝統として自負するものも少なくない(1,15,24,25)。ただし、回想録の性質上、学生生活を美化しがちであること、否定的に捉えた卒業生は回想録で「念書」に触れない、といった偏りがありうることに留意する必要がある。とはいえ、後述するアンケート調査によっても、大多数の卒業生が「念書」を含む書院の中国語教育を高く評価していることは事実である。一方で、先輩に「しごかれた」という印象を語るものもある(29,34)。戦後作家として大成する大城立裕(44期)は「予科1年の頃は普通の発音どころか、中国語の訓練だけでものすごいプレッシャーでありまして。何でこんな学校へ来たんだろうと思って1度は泣きました。泣いたのは自分だけかと思ったら同窓会で聞いたらみんな泣いたそうです」と語る同時に、「あれだけの訓練を受けて、3か月目には買い物ができるようになり、1年経てばある程度の会話ができるようになるわけです」(34)とも述べ、複雑な心情を吐露している。大城の小説『朝、上海に立ちつくす』から、「念書」のシーンを引用しておこう。

「支那語を読んでやろうか」と、二年生は一年生によびかける。あるいは一年生のほうから、誘いにゆく。「お願いします」第一外国語はもちろん中国語——北京官話。授業が一週間に十三時間あるが、これに追いつくには、寮で復習を日に三時間以上はしなければならぬ。そのうち、朝食前に一時間、夕食後に一時間は、上級生が教師になる。一人が一人を教える。県出身の先輩が同室の上級生が受け持つ。(中略)予科二年生は、「支那語を読んでやる」ことを面倒だとは思わない。むしろ教えることの快感を覚える。ほとんどが院子^{ユアンズ}に出てやる。勝手な場所に腰をおろしてやる。「ティーイーコーハー チーペンサンユイー チシーイー」(第一課 基本散語 其一)院子一杯にその声が飛び交う。四声の基本練習など、まるで鴉の鳴き声だ¹⁸。

ここでいう「四声の基本練習」は「華語声音編」を用いた声調の練習、「ティーイーコーハー」以下は「基

¹⁷ 1942年全訂版で「基本散語」に文法事項が網羅されたこと、会話体だけでなく白話体の読み物が加えられるなど、「文法理解に配慮し」「総合的内容の教科書」へと発展したことは、石田卓生2019、386〜388頁に詳しい。

¹⁸ 大城立裕1983、35頁；同1988、47〜48頁；同2002、176〜177頁。引用に際して、改行は省略した。大城立裕1988では「私の小説で、学生がまことに流暢に中国語を喋っている。これは嘘だと喝破した先輩がいた。「ほんとうは、何も喋れないのです」。たしかにそうだ。私も認める」(40頁)という。同37〜38頁に述べられている鈴木樺郎をモデルにした鈴江先生を書き加えた箇所は、大城立裕1988、299〜301頁、同2002、295〜296頁参照。

本散語」の問答体を指している。小説であるとはいえ、「念書」の克明な描写として価値が高い。他方、山本隆 (38期) の自伝的小説では、

初めての授業以来、私をうんざりさせたのは、週十時間近い中国語の授業と、朝夕一時間の“ア、アア、アーア、アー”といった中国語四声の発音勉強であった。中国語の基礎が大切であることはわかってはいたものの、私には全く無味乾燥な退屈な時間だった。最初の一年間というもの、新入生たちは朝起きるとまず部屋を掃除し、中国語の教科書を抱えて同県先輩の二年生の部屋を訪ね、夕方は夕方で、夕食後院子の適当な場所を選んで、雨が降ろうか風が吹こうか中国語を読んでもらわなければならなかった。(中略) 教室で鈴木教授のあの黄色い顔を見ているだけで憂鬱なのに、朝夕ア、ア、カ、カの反復練習を続けるのにはいよいようんざりしてしまうのであった¹⁹。

と記されている。

3. 東亜同文書院の中国語教育における「念書」の意義

ここで先行研究における「念書」に対する評価を見ておこう。石田卓生氏は「学生による自主的な課外活動でしかなく、学生の熱心さを示してはいるものの、学校としての教育自体をあらわすものではない」として、書院の中国語授業が少人数ではなく、1クラス50名程度であったために、大人数クラスの欠点を補う補完的なものと捉えている²⁰。それに対して、今泉潤太郎氏は「2年生が1年生を指導するという形で、自発性を伴いますが、むしろ制度として学校教育の中に組み入れられ、「これを行うことが日課で学園生活の一部となって」いたとする²¹。本稿でも、多くの回想録に基づき「念書」の内容を検討した結果、今泉氏と同じように考える。すなわち、東亜同文書院の中国語教育にとって「念書」は義務的で不可欠な発音指導であっただけでなく(10,20)、「念書」をとおして得られた先輩後輩の信頼関係(11,17,18,23,28,31)、さらには教員と学

第10表 入学後力を入れた分野 (複数回答含む)

クラブ活動	122	日中関係	3
語学	100	語らい、友を得る	3
勉学	85	飲酒	4
中国、中国人研究	15	勤労奉仕	2
政治、思想、哲学	15	入れられず残念	8
文学、読書	8	その他	9
学芸部、学友会	9	なし	18
中国人学生とのつきあい	3		

生の濃密な人間関係(15,19,30,31)に支えられて、書院の教育は成り立っていた。「念書」は疑似家族的な集団生活の一環として存在し、そうした人的環境の中で行われる中国語教育こそが書院の特色であった²²。「念書」のあとで先輩からおこ

¹⁹ 山本隆 1977、37～38頁。

²⁰ 石田卓生 2019、450～451頁。『華語萃編』初集の第17課「循循善誘」、第18課「溫故知新」の課文は、朗読や暗誦に消極的で自信のない学生を教師が励ます内容で、おそらく実際の授業風景に取材したものであろう。また1年生1学期の黙写の問題として、「只要熱心把書多念幾遍，用心記一記，到時候很容易的就寫出來了」（教科書を何度も音読し、しっかり覚えさえすれば、試験の時にはたやすく答案が書けるでしょう）と音読の重要性を説く内容の書き取りが出題されている。東亜同文書院華語研究會 1932、40頁。

²¹ 今泉潤太郎 2007、11頁。

²² 書院のもう1つの伝統である「寮回り」に対して、キリスト教信者の坂本義孝（1期、のち教員）は禁酒を唱える

られるレモン・ティー(25,26) や炒飯(22)、炒麵(26)などが懐かしく回想されているのは、こうした書院の人間関係を証するエピソードだといえよう²³。

第11表 書院教育の特色について

語学教育	49	アカデミック	5
自由	60	中国理解	5
全寮制、上下級生一体	25	日中友好人材養成	4
人格形成、人間教育	23	高商教育	5
実用教育	22	徳育、知行一致	7
教師と学生との交流	15	中国の実地体験	4
広い視野	9	きびしさ	6
自主性	10	不十分	10
建学精神	8	その他	33
すぐれた教師	10	わからない、不明	15

別の角度から「念書」の重要性を証する

ものとして、藤田佳久氏が東亜同文書院卒業生に対して1994年末に実施したアンケート調査を見てみよう。このアンケートは当時健在であった1438名の卒業生に送付され、388名から回答を得て、回収率は27%であった。藤田論文で集計されている各期ごとの回答数を、ここでは合計した数字のみ表にして掲出する²⁴。

第10表「入学後力を入れた分野」、第11表「書院教育の特色について」によると、いずれも語学とする回答が多い。第14表「書院における中国語教育のすぐれている点」の上の2つの回答はいずれも

第14表 書院における中国語教育のすぐれている点

寮内で上級生による発音練習	46	反復効果	3
発音教育	38	十分な基礎力	3
実用会話	41	文法と速読	3
実地で習得	35	完成された体系のテキスト	5
中国人と日本人両教師の授業	28	北京官話に徹した	1
中国人教師によるマンツーマン授業	18	学生にやる気を与える	2
すぐれた教師	10	意見なし	10
語学授業時間が多い	9	無記入	52
テキストの丸暗記	7		

「念書」を指すもの

と見なすことができ。なお第14表からは、大人数の講義とは別に、「中国人教師によるマンツーマン授業」も行われていたことが知られる。

「大旅行」で中国語が通じたかを問うた第19表から、藤田氏は「三カ月余りの長丁場の中で、多くの地方語と接し、機転をきかしながら旅をすすめた様子がかがわれる。旅行中、各県に入ると県知事

第19表 「大旅行」中の中国語

大体通じた	77	不十分だった	6
十分通じた	13	全く通じなかった	2
官吏には十分通じた	3	地域による	1
どうにか通じた	13	筆談も加えた	4
少し通じた	2	あまり話さなかった	4
方言は通じなかった	6	無記入	29
専門用語はむづかしかった	3		

に挨拶し、県内の通行を認めてもら

うのが最も重要な事項で、その時に危険地帯は中止勧告されたり、護兵を雇ってくれたりする。多くの知事は北京語がわかり、その基本的部分はクリヤー出来たことは旅行をすす

など、一定の多様性、自由を重んじる雰囲気は書院には存在した。石田卓生2019、199頁。

²³ 言語習得に他者との関係（社会＝社交）が不可欠であることは、辻野裕紀2016参照。辻野氏は、「幼き日に両親をはじめ、親戚や近所の人、幼稚園の先生など、〈重要な他者〉(significant others) の日本語を聴きながら、いつしか日本語話者になったのである。周りの大人たちが幼き我々に日本語でたくさん語りかけてくれたから日本語話者になれたのである。それは我々が愛されてきた証左でもある。愛なしにことばを習得した人はいない」という(7頁)。

²⁴ 藤田佳久2001。

める上で重要であった」(41~43頁)と分析する。さらに、アンケート実施時に回答者の多くが退職した高齢者であるにもかかわらず、生涯を通じて中国語と何らかの縁のある人が半数近くもいるという、

第32表 中国語への親しみ (現在、中国語の使用)

よく使う	45	あまり使わない	99
時々使う	103	使わない	120
		不明	13

きわめて興味深いデータが示されている(第32表)。藤田佳久氏によるこの貴重なアンケート調査から、卒業生が「圧倒的に全寮制による教育とそれをベースにした上級生が下級生に教育す

る中国語発音と中国語教育のシステムを評価している」こと、また「それは今日の大学教育では完全に欠落したシステムであり、その分、書院教育の特色が浮かび上がってくる」(33頁)ことが見て取れるのである。

4. 戦後日本の大学における「念書」の継承

「念書」は、戦後引き揚げてきた書院の教員により日本の大学で継承された。1983年、筆者が東北大学教養部で中国語を学び始めた際、「念書」と同じように、2年生の先輩からマンツーマンで6月下旬まで発音指導を受けたのである。当時東北大では「チューター制」と呼ばれており、中国語全受講生の義務であった。私の場合は月曜から土曜まで毎日昼休みに30分間の発音指導を受けた。1日おきに1時間、あるいはもっとまとめて行うペアもあったようだが、1週間に3時間行うように決められていた。内容は音節表の音読が中心だったように思う。ただし、声調は付けずに、すべての音節を第一声で読んでいた。最後には課文の朗読も行うようになった。最初は先輩が手取り足取り指導し、模範の発音を聞く時間があるものの、徐々に慣れてくると、30分のうち大半の時間、私が一人で音読するようになる。先輩は黙って聞き、ときどき間違いを指摘してくれる。この経験は、遠藤光暁氏が「音読によって外国語を自分の全身に染み込ませ、意識の領域のみならず無意識の領域にも組み込まれるようにする」と述べる音読の重要性を体得するものであった²⁵。

東北大で「念書」が継承されたのは、18期生で東亜同文書院の教授を務めた野崎駿平が、戦後東北大で教鞭を執ったことに由来する(1953~62年教養部在任)。野崎の退官後、受業生である志村良治(1962~67年教養部、1967~84年文学部在任)、阿部兼也(1971~95年教養部在任)が東北大学の中国語を担当した。1953年の野崎の受講生は3名、授業は自宅で行われ、授業後には奥様の手料理がふるまわれたという²⁶。教養部での志村の受講生は8名程度で、上級生による「念書」はなく、直接先生から発音指導を受けたという。今回限られた範囲で東北大学の卒業生に聞き取りをした結果、「念書」を復活させたのは阿部兼也であるらしい。野崎、志村の時代は中国語履修者がきわめて少なかったため、上級生による「念書」は行われなかったが、両先生による学生思いのエピソードは多い²⁷。阿部先生も授業だけで

²⁵ 遠藤光暁 2006、15頁。

²⁶ 松澤信祐 2005、280頁。

²⁷ 菅野俊作 1983、塚本照和 1992、穴沢一寿 1993、三宝政美 1996、戸田七支 2005。

なく、学生と多くの時間をともに過ごすことを大事にされた。東亜同文書院的な雰囲気、東北大の中国語教員の間で受け継がれ、1995年に阿部兼也が東洋大学文学部へ転出するまで続いたのである。

東北大で「念書」が可能だったのは、中国語専任教員が阿部先生一人だったため、独自の方針を貫徹できたからだと思う。野崎から継承された書院の教授法は、「念書」以外にも、「黙写」(「聴写」と呼んでいた)や「暗誦」が阿部先生によって行われた。中国人教員と日本人教員と一緒に教壇に立つ書院式の授業も、志村先生が趙迺桂先生(1950~89年文学部在任)と実施していたという。しかし、こうした教授法は、1990年半ばから中国語履修者が急増し、多くの非常勤講師を抱えるようになると、理解を得にくくなったようである。戦後、大阪市立大学で中国語を教えた41期生の宮田一郎は、年長の同僚から発音指導について指摘され、「今の新制大学の教養課程の中国語教育と、われわれ書院の中国語教育とは違うんだなあ、ということを痛切に感じた」²⁸というように、中国語担当教員が複数いる場合は、書院の教え方を貫くことは難しかっただろう。京都大学の尾崎雄二郎(44期)も「念書」を行ったとの証言はない²⁹。他方、神戸市外国語大学では東亜同文書院から引き揚げてきた坂本一郎が徹底した発音指導を行い、上級生による指導も取り入れて、佐藤晴彦氏に受け継がれた。佐藤氏退職後も複数教員の交代制、留学生TAの活用により任意参加の「朝練」として維持されていたが、新型コロナの影響で中断されているという(2022年8月現在)³⁰。愛知大学では鈴木擇郎だけでなく、閉校となった書院から愛知大学に編入した元書院生が中心となって「念書」が行われていたという³¹。

石田卓生氏は、「東亜同文書院の中国語教育は戦後においても存在していた。(中略)それらが戦後の中国語教育、研究の場においてどのような働きを為したのか、何が受け継がれたのか、或いは姿を消したのか等、より具体的に把握する必要がある」という³²。本稿ではわざわざ東北大での事例を新たに紹介するにとどまったが、他にも東亜同文書院の教員または書院の卒業生が、戦後日本の各大学で中国語を教えた事例は多数ある³³。それらを詳細に調べることにより、「念書」が戦後どのように受け継がれ、そしてやがて消えていったかを明らかにできるはずである。

²⁸ 宮田一郎 2012に「私が中国語を教え始めた頃、先輩の教授に「お前そんなに馬鹿みたいで、このアはいかんとかこのイはいかんとか、そんなにやかましく言うのはよせ。音韻論的に許容される範囲ならまあまあでいけ。そして先に進め。学生の発音は徐々に直していったらいい」ということを言われました」という(81頁)。この講演録は、書院の中国語の授業内容について最も詳細に語ったものであり、貴重な記録である。

²⁹ 浅原達郎 2007。小南一郎ほか2022。

³⁰ 佐藤晴彦 2009、4頁。紅粉芳恵・水野善寛 2017所収の、佐藤晴彦・日下恒夫「対談：中国語と私」51~55頁、佐藤晴彦「坂本一郎先生」96頁参照。

³¹ 今泉潤太郎 2007、20、23頁。石田卓生 2017、8頁。戸田七支 2005、308頁。

³² 石田卓生 2010、239頁。

³³ 鈴木擇郎、野崎駿平、坂本一郎に加えて、味岡謙(13期、日本経済大学)、高橋君平(16期、神戸経済大学)、熊野正平(17期、一橋大学)、福田勝蔵(20期、名古屋学院大学)、石田武夫(26期、滋賀大学、福井工業大学)、村部和義(26期、九州東海大学)、魚返善雄(27期、東京大学、東洋大学等)、桑島信一(29期、愛知大学)、内山雅夫(34期、愛知大学)、水野鈴彦(34期、中央大学)、山口左熊(35期、一橋大学)、武藤義道(35期、東海大学)、芦沢実(37期、東海大学)、金丸一夫(40期、愛知大学、千葉商科大学)、池上貞一(40期、愛知大学)、宮田一郎(41期、大阪市立大学)、尾崎雄二郎(44期、京都大学)、長谷川良一(44期、早稲田大学)、阿頼耶順宏(44期、追手門学院大学)、影山巍(教員、九州大学)など。ほかにも専門科目に加えて中国語を教えた教員が多数いると思われる。『東亜同文書院大学史』1982「第三章 各界における同窓の活動」等による。

小 結

最後にごく簡単に外国語教育学の観点から「念書」を見ておこう。近代日本の中国語教育は、1871年に外務省が設置した漢語学所を嚆矢として、東京外国語学校や善隣書院へと広がった。そこでは唐通事以来の暗誦を重視する教授法が行われ、それは戦後の東京外国語大学でも基本的に変わらなかったという³⁴。斎藤兆史氏によると、こうした方法は中世ヨーロッパのラテン語学習でも同様だったらしいが、「第二次世界大戦後になると、日本は形式主義的な教育を妙に毛嫌いするようになったから、生徒に同じ英文を何度も音読・暗唱させるような教授法は流行りようがない。(中略)だが、どんなに時代が変わろうが、基礎的なことを何度も繰り返して体のなかに練り込むという学習の基本は変わらない。その学習法の語学版が素読であり、暗唱なのである」という³⁵。

とはいえ、「念書」のみを過大に評価して東亜同文書院の中国語教育を論じることは慎むべきであろう。『華語萃編』二集～四集の高度に実務的な内容、大旅行のために編纂された『北京官話旅行用語』(1925年初版)などにこそ、書院の中国語教育の精華は認められるべきである³⁶。書院で英語教員を務めた朱牟田夏雄(1932～40年在任)は、「同文書院の教師をしていて感じたことを言うと、あそこの学生諸君は中国語にはすぶる熱心なことも熱心だけれども、また巧くても下手でも何とか中国人を相手に意志を通じてしまうということもあつた。巧い人は当然実に巧いが、下手な者でも何とか意志を通ずるというのには、見ているとかなり高飛車で、自分は覚束ない中国語を繰返しながら、「これだけ言ってもわからなければおまえのほうが悪いんだぞ」というような態度が感ぜられた」と、書院生に備わったある種傲岸な胆力を指摘する³⁷。宮田一郎氏は書院生の中国語の特徴として、「北京語のほかには上海語を解するというのは、一つの有利な点で」あり「この効用は、たいへん大きかった」ことを指摘し、南京国民政府・汪兆銘の通訳を務めた清水董三(12期)の例を挙げる³⁸。このように書院の中国語教育によって培われたものは、現在の大学教育で想像できる範疇をはるかに超えるものだったといえよう。

資料：回想記等に記された「念書」³⁹

- (1) (3期) 学生は毎朝中国語の本を持って寮の階下の廊下や、校庭の隅、裏門の土饅頭の墓場などで声張り上げて口韻腔調の練習をなし、きわめて真剣熱心であつた。新入学生が来ると先ず四声の稽古で、阿々、茶々の調子を大声でどなるのだから、古い学生からソレまた鴉が沢山来た喜びと笑いでひやかされた。中国語の授業には満

³⁴ 六角恒廣 1988、54～55、418頁。奥水優 2021、51、232頁など参照。

³⁵ 斎藤兆史 2003、33～34、72頁。優れた英語力を駆使した外交官・幣原喜重郎も英国人教師から暗誦を課されたことは、幣原喜重郎 1951、226～228頁；2015、243～245頁参照。シュリーマンの学習法も音読と暗誦であったことは、シュリーマン・池内訳 1995、32～35頁；シュリーマン・村田訳 2007、26～31頁参照。

³⁶ 六角恒廣 1988、332～337頁。『華語萃編』初集～四集は六角恒廣 1992年所収。今泉潤太郎 2007、18～20頁参照。

³⁷ 朱牟田夏雄 1979、19～20頁。書院在任期間は、朱牟田夏雄 1977、165頁による。

³⁸ 宮田一郎 2016、201～202頁。『華語月刊』には「滬語日譯(聴取即譯)」など上海語の試験問題も掲載されている。

³⁹ 『東亜同文書院大学史』からの引用は、1982年版では文章が整理されていることがあるため、原則として1955年版から行う。引用に際し、改行は省略した。

旗人出身の秀才述功と全海の二先生に邦人教授が通訳として付き添い、みづちり指導された。四十余人のボーイ厨子悉く中国人で、また一步校門を出れば悉く是れ中国の人、中国の地だ。その環境と人で育てられ、練り上げられた書院の中国語だけは書院の特色として誇りを持つていた⁴⁰。

- (2) (4期) 最初の一年間は朝は支那語の発声の練習と夜は戦争の噂話やお国自慢で過ごし落付いて勉強もしなかったが、一年の終りに近くなってバルチック艦隊の北上という大きな事件にぶつつかつた⁴¹。
- (3) (5期) 第五期生の在学中特記すべきことは、中国語の教授方法が改善せられて、やや科学的になったこと、例の内地調査大旅行が吾々の期から開始せられたことである⁴²。
- (4) (8期) 初めのほどこそ、大陸の風物の面白さ、生活の変化に、ただ茫然としていたのであるが、純支那風の妙な建物に入り毎日庭へ出てアー、アーと叫んで書院の鳥といわれ、食堂に立つて六品料理を食べ、墓のある野原で南京豆を着に老酒を飲んでいるうちに、書院の正体がだんだんと分つて来た。私共は中学校を出て専門学校へ入つたのであるが、同文書院はただの専門学校ではないということが分つて来たのであつた⁴³。
- (5) (10期) 書院に入学して先ず困つたのは支那語がむづかしいことだつた。ある者が「今更支那語に精力を打込むなんて時代後れであり、世界の文化から取残されそうだ。一層のこと退学帰国して高商あたりにでも行つた方が利口だ。」といへば、これに賛成組と反対組とが出来、互に議論をたたかわしたのであつたが賛成組には結局ホームシツク患者が多かつたようだ。しかしこの患者の中から一人の退学者も出ず、当時弱気であつた連中で最後まで大陸に頑張つた向も相当に多い⁴⁴。
- (6) (11期) 未明に寮を飛出し花園子に出て、大声をあげて四声の練習に努力したが、北関東生れの私は発音では関西、九州出身者にはどうもひけ目を感じてならなかつた。(中略) 英語の菊池先生、華語の青木、真島両先生、朱先生等は今も忘れられぬ⁴⁵。
- (7) (13期) 朝起きるとすぐ華語の音読が一斉に初まる。(中略) 吾等の支那語に青木喬教授があつた。華語、時文、尺牘を教わつた。先生は支那語学者で北京官話は得意でなかつた。四声、有気、無気の別がなかつた。然し時文、尺牘にかけては日本の権威であつた。華語の発音と四声の正確さで他の追隨を許さなかつた先生に真島次郎教授があつた。先生は全生涯をあげて書院のために尽されたが惜しくも壮年にして逝かれた⁴⁶。
- (8) (14期) われらに中国語の最初を教えてくださいましたのは二期の先輩真島先生であつた。むづかしい中国語の四声をジュンジュンと辛棒よく教えて頂いたのであつた。(中略) 真島先生はわれら中国語学習の中心であつた。中肉中背で、色白で、眼鏡をかけて秀才らしい澄んだ眼をされていた。中国語の発音はまことに正確で、多少シャガレた声をされていた。やわらかな微笑が頬にあつた。われわれは中国語の手ほどきの四声をうんとたたきこまれたが、最初は校舎の傍の雑草の生えた空地や運動場に朝早くから練り出て、同僚の先輩諸兄から四声をくりかえしくりかえし大声を出しながら教わつた。校舎近くに住む外人や中国人はカラスの鳴き声だと囁っていたそうである。それ程われわれは熱心で懸命であつたのだ。真島先生は「秀才」の朱先生と一緒にわれら一年を教えて下さつた⁴⁷。

⁴⁰ 大倉邦彦「第三期生の回想」、『東亜同文書院大学史』1955年版、175頁；1982年版、409頁。

⁴¹ 堤昇、上島清蔵「第四期生史」、『東亜同文書院大学史』1955年版、177頁；1982年版、412～413頁。

⁴² 小谷節夫、末綱胖「内地調査旅行始まる(第五期生の記録)」、『東亜同文書院大学史』1955年版、180頁；1982年版、415頁。

⁴³ 米内山庸夫「第八期生回想録」、『東亜同文書院大学史』1955年版、185頁；1982年版、423頁。

⁴⁴ 小口五郎「第十期生回想録」、『東亜同文書院大学史』1955年版、192頁；1982年版、429頁。

⁴⁵ 関口嘉重「同期生追想集：語学と国民外交」、『東亜同文書院大学史』「第十一期生の思出」1955年版、195頁。

⁴⁶ 富田寿男「大村より上海へ(第十三期生の回想記)」、『東亜同文書院大学史』1955年版、200頁；1982年版、440頁。

⁴⁷ 鎌田政国1992、39～41頁。佐藤恭彦・藤田佳久2017、162～166頁に再録。

(9) (15期) 愈々校舎に入ってから勉強せねばならぬと思ひ先ず皆が支那語にとりかかつた。支那語文はシツカリやれと先輩達の助言もあつて、誰も彼も熱心に勉強した。運動場で朝早くから啞々と鳥の鳴真似た様なことをやつたことを今も思出す。支那語の先生は述先生でこれに真島先生が付いておられた。二人とも親切丁寧であつた。黙写という学科は発音の聞き別けに非常に役立つ⁴⁸。

(10) (15期) — 同文書院の、例の「カラス教育」という、愛大にも“念書”というのがあるわけですけど、あれは上級生が下級生を何人か受け持って発音練習させるというのは、全寮制だということがあったからでしょうね。

鈴木 ええ、全寮制。たいてい最初、同県の者。

— 同室じゃなくて。

鈴木 同室じゃなくてね、同室でもおつたが、だいたい同県の方が多いね。で、先輩が寝坊してなかなか起きてくれないもんだから、下級生が行ってね、起こして呼んでくるわけ。教えられて迷惑なような学生もずいぶんいたんじゃないかな。それでもね、慣れるだけでもよかるうっていうわけでね、なるべく奨励してきた。だから、義務ってようなもんでね、教えるほうも教える義務があると、習うほうもね、習わなければちよつと困るじゃないかっていうようなことで。それもね、そんなものは四月に入ってきて夏休みまでは一所懸命やるが、夏休み後は、あまり夏休み前ほどじゃなくなるね。だがねえ、また変なのがついて、部屋じゃみんなに、やかましいって言われるもんだから、外へ出て電灯の下でやってるやつがいるんだね。そうすると、住宅の先生たちが迷惑がつて、ああ毎晩やられちゃ困るってなこと言ひだしたりね。ぼくらの時はね、ぼくらのところの周囲は全部、西洋人の住宅だったわけだ。その住宅の、こう、まわりがあつて、その真ん中の庭がわれわれの庭だった。その庭だからね、向こうの住宅の辺りで、それをやるわけです。それがねえ、朝早くやるでしょ、夏なんだ、もう。夜が明けてからすぐやるものだから、西洋人から文句が出てね、あんなに朝早くやられちゃ困るって言って、まあ、そんなこと構わずにやりました。だが、あのやり方は、非常にいいってことはあるでしょうね。その当時からぼくは、現在もそう思っているんでねえ。ここでもずいぶん下手な連中が下級生を教えるなんてどうも、それを教わるほうも迷惑だろうとは思ひながら、しかし慣れるということがいいんだからね。発音が良い悪いってのはだんだん上へいくとね、自分がわかってくれば、発音も良くなるから。とにかく慣れるってことは必要なんだから、下手でも教えろ、と。それから下手な上級生にでも、習ったほうがいいとぼくは言つてたんですがね。確かにあの方法はいいと思ひます。そして、自分で、とにかく発音がいい悪いにかかわらず、読むことですよ。自分で自分だけで読むことですよ。他の人に教わらなくて、自分が読むだけでも非常に、語学の力をつけるのにはいいと思ひますね。何でも読んでりゃ覚えましますね。それから、発音を矯正するようになりますね。そうしてやると、自分の発音と先生の発音の違いが、だんだんわかってきますよ。そうすると、自分の発音が矯正できるわけですよ⁴⁹。

(11) (17期) 一年生は朝早く起きて自習室の掃除をする^{ツアオフワン}と七時の^{ユワツツ}早飯の前後に院子で「爾要那個我要這個」の練習、二年生が読んでくれるあとをつけて、廻らぬ舌に苦心したものだつた。併し今から考えるとこれは全寮制度なればこそ出来たことだがあれは語学研究には実により伝統だつた。而已ならず、上級生のエラスも親切さも此シナ語を読んでもらったことを感じさせられた。今日我々が同窓に対して持つ、一種独特の「不是外人」的な感じというのは斯ういうところにも淵源しているのではないかと思われる⁵⁰。

(12) (20期) 当時の同文書院の中国語教育には次の長所と短所があつたと思う。長所は三つあつて、その第一は九月上海に渡つて後三ヶ月程行われる課外の発音訓練である。それは毎朝毎夕同室又は同郷の先輩が指導して(華語

⁴⁸ 古川清行「第十五期生の回想」、『東亜同文書院大学史』1955年版、205頁。

⁴⁹ 「鈴木澤郎氏に聞く」、愛知大学五十年史編纂委員会1998、25～26頁。

⁵⁰ 熊野正平、安良城盛雄「第十七期生史」、『東亜同文書院大学史』1955年版、211頁；1982年版、456頁。

萃編」というテキストについて毎日平均百回位その日又は前日学んだ所を読む方法である。これによって誰でも二三月で北京語の発音は一応できるようになり、四声を間違えるというような心配はなくなった。これと共に北京語話しことばの句調を自然と覚えて来たのであったが、この後者の価値の方は私は実は神戸に来て北京語と接触が少なくなって始めて気づいた。第二の長所は中国人の先生の多いことで、二年経った時は北京人の話なら大体わかるという自信がついた。第三は大旅行と称して二年が終った夏——当時は中国的に夏入学夏卒業であった——学生が数人づつのグループに分れて中国各地を旅行する制度であって、私は広東省から福建を通り後に中共の根拠地となった江西の瑞金会昌を経て、漢口、北京、済南、青島のコースであったが、南の方言で苦労した後だったので、北京に行った時は初めての土地ながら全く郷里に帰った思いがした。同時に南方でも県知事や警察部長は官話が上手で北京官話のその頃の中国における地位や効用を知る上により経験であった。旅行が会話の実地練習に役立ったことは言うまでもない。長所の反面缺点も多いが、主なのは二つと思う。一つは会話テキストに重点を置きながら教室で実際の会話が当時少かったことで、これは三年間にたった一度会話があったような気がするだけで、それも一年の時で殆んどしゃべれなかったので記憶が薄いのである。後に私が教師になった時には会話の時間が二三年生週二時間あったが、中国人の先生があまりに雄弁すぎて50分授業に2人乃至5人しかあたらず、学生は会話のネタをノートに二三行用意しておけば数ヶ月間は安全という結果となり、聞く力はついたが会話の訓練としては甚だ不充分であった。(中略) 缺点の第二は北京語、それも狭義北京語の偏重である。純北京語を正確に学ぶことは結構な事ではあるが、発音四声に重点を置くあまり、学生はちよつとでも発音がちがえば正しくない汚い中国語と考え之を排斥する気分が生ずる。上海に居りながら上海数百万の中国人の言語に無頓着となるのみか、北方に住んでも北京以外の土地では中国語を学習する気持になれないという致命的缺陷が生じて来た⁵¹。

- (13) (21期)「支那語」は主として真島次郎先生に鍛えられた。清水董三先生には、東京から上海まで引きつれられて行つた因縁で、その後卒業するまで何かにつけ、最も親身に面倒を見てもらった。(中略) そのほか四年間に教を受けた教授としては(中略)青木、(中略)坂本、鈴木、(中略)等の諸先生があつた⁵²。
- (14) (23期) 四声を巧みに手で示し、支那語の神様と云はれていた真島教授の身にしみる講義をうけたのも、恐らく私共が最後ではなかつたらうか⁵³。
- (15) (23期) 学校の授業について少し述べておきたい。まず中国語について言えば、それはもう天下に名だたる東亜同文書院のことだから、その教授陣の強大なこと、教授内容の素晴らしいこと、とても普通では想像も出来ないほどで、それは全くすごいものであった。(中略) この卒業式の最も特徴的な点は、三人の卒業生が、一人は中国語で、一人は英語で、一人は日本語で、挨拶するということである。その挨拶の文章は、自分で書くことが要求されていた。私は中国語の分を命ぜられ、自分で原稿を書き、念のために、担任の熊野先生に見て頂いたが、先生は少しも直されたかたことを覚えている。(中略) 少し緊張した感じもあつたが、自分で言うのも変だが、割合にうまくいったように、思った。挨拶を終えた時、盛んな拍手が起きた事は、今なお忘れられない嬉しいことであつた⁵⁴。
- (16) (25期) かくて朝夕、撒布を握つて自習室の床拭きから院子でのアーアー鴉の鳴き声を日課とした緊張の大陸生活第一歩が始められた。時正に花紅柳緑の江南の春酣で、クリークの柳を漏れる鶯の声を教室に聴き、夕、自習

⁵¹ 坂本一郎 1958、6～7頁。

⁵² 水谷国一「第二十一期生想出(四年制の始まり)」、『東亜同文書院大学史』1955年版、223頁。

⁵³ 川戸愛雄「第二十三期生回顧録」、『東亜同文書院大学史』1955年版、230頁；1982年版、496頁。

⁵⁴ 永野賀成 1992、43～44頁。

室の鉄格子からは天主堂の鐘の音が涼風に乘つて、流れてくる好季節であつた⁵⁵。

- (17) (28期) 早朝始業前と夕食後一時間余り、先輩を囲んで校庭のあちら、こちらで華語の訓練が行われているのは、書院独特の光景である。夏休みまでの一学期間は一日も休みなく念書が続けられた猛訓練は、寮生活の中で最も強い思い出であろう。(中略) 百人の新入生の内五〇パーセント以上が中学の卒業成績一、二番という優等生であつた。(中略) 全員が寮生活であり、四ヵ年は上下の区分なく、親しく交際が出来たことが、人間形成に非常に役立った。また教授も全員近くの家族宿舎に起居されていたため、学生も家庭的に教授と交際が出来たこともプラスであつた⁵⁶。
- (18) (28期) 書院の環境に馴じめないものは、早めに引揚げ帰国するがよいとまで喝破した教授もいた程で、それが本人の一生を誤らぬために親切であり、ホームシックとかメラニコリーなんて生やさしいものではないと解されていた。各道府県単位の先輩、後輩がグループになって、朝や夕な、三三五五中国語学習の場が展開されるあたりから、単純なことだが書院生活の人間関係が形成され、独自の伝統を培う礎となつてゆくのであつた。(中略) 語学は書院の本命であり、英語と中国語に課せられたウエイトは大きく、外国語弁論大会では自分も中国語で二回程壇上に立ったのを覚えている。先輩魚返氏の英語の弁舌に対し、審判のミスタークリーネが口を極めて賞賛したのも忘れられない⁵⁷。
- (19) (28期) 「黙写」とは、いわゆる書取りで、先生が中国語を読むのを文字に写してゆく。また、「尺牘」とは、中国語で手紙を書く課目である。授業は社会に出てからすぐ役にたつ、いわゆる実学が多かつた。同文書院は高等商業のひとつであつたかもしれないが、何と云つても中国語を勉強する学校であつた。授業課目の中でも、中国語が最優先となつていて、一年生から四年生まで、毎日の課目の中に、中国語の入っていない日はなかつた。また朝食前と夕食後に一時間ずつ、上級生が下級生に発声練習の指導をしていた。(中略) まず、「ア」音で四声を勉強する。院子(校庭)の芝生の上、寮の部屋毎に室長を中心に集まつて、朝夕発声練習をする。「ア」「アー」「アッ」などと、大きな口をあき、声をそろえて練習する。書院のカラスがさえずっているといわれたが、まさにカラスそのものである。不思議なもので、はじめは全く手におえなかつた四声も、あきないで続けているうちに、少しずつ格好がついてくる。さらに進むと、文章の中に出てくる文字が、四声のうちのどの型にあてはまるのか、自然に見当がつくようになる。(中略) 中国語には鈴木扶郎、熊野正平両先生という、その道の大家がそろつていて、鈴木先生は極めて真面目な方で、授業時間に息がつけなかつた。試験の点数もからくて、私は大いに苦勞した。反対に、熊野先生は穏健な方だつた。両先生とも、戦前から戦後にかけて、それぞれ大部の辞典編集の偉業を完成された。(中略) 同じく中国語の先生に野崎駿平先生がおられた。新進気鋭の先生で、甚ださっぱりとしたご性格だつた。奥様が私と同郷の仙台出身であつた。私は暇があるとよくお宅へ参上して、ご夫妻からお話を伺い、またご馳走になつたりした。望郷の念をいやすと同時に、書院生活の潤いとなつた⁵⁸。
- (20) (30期) 書院の七不思議の一つに「書院鴉」というのがあつた。中国語の授業が始まると、新入生たちは同県人の先輩(二年生)に中国語の発音練習でしごかれる。これは二年生の義務的な役割となつていて、暑中休暇までの二ヵ月間、毎朝毎晩、朝食前と夕食後の一時間ずつ、「アーアー・カーカー」から「你要哪個」まで、大声を張り上げて中国語四声の発音練習に精をだし、時ならぬ「人間鴉」の鳴き声が四辺にこだまする。これは書院独特の中国語勉強法で、全寮制にしてはじめてできることでもあつた。中学時代の五年間、英語を習つても会話は一向に上達しないが、書院ではこの独特の勉強法により、中国語に関する限り一年も経てば、どうにか会話ができ

⁵⁵ 安次隆雄「第二十五期生回顧録」、『東亜同文書院大学史』1955年版、236頁。

⁵⁶ 高橋荘輔「剣道も老酒もうまかつた」、庄子勇之助1970、119～125頁。

⁵⁷ 菅野喜久哉「わが書院語録」、庄子勇之助1976、135～136頁。

⁵⁸ 庄子勇之助1986、88～95頁。

ようになる。ありがたい先輩のしごきであり、書院らしい伝統であった⁵⁹。

- (21) (32 期) 「入学して僅か二カ月しかない夏休みまでの期間の長く感じられたこと、その間二年生の同郷の先輩から夕食後習った華語萃編の発音練習の苦しかったこと。われながら情なく思ったことも二度三度に止まらず、それが夏休みが終って帰院して見ると全く嘘の様に馬鹿らしく思えて来た思い出が今でも脳裡から去らぬ……」(岩佐元明談) 一年の立つのは早かった。毎朝毎夕二年生に華語萃編を暗誦させられ、右向くにも、左向くにも、誰かに手を取って連れられて行かれぬばならなかつたのも束の間、夏休みから帰って来て暫く立つたころには北四路、文路、鴨緑路、乍浦路のカフェにも映画館にも一人で結構出かけられるようになっていた。(中略)支那語と運動に明け暮れた書院生活はなつかしい思い出ばかりです。特に支那語に苦勞し勉強になった大旅行、(後略)⁶⁰。
- (22) (33 期) 梅雨時ともなれば院子の書院鴉も「ノド」が痛くなる。二年生の個人教師は、大概両角を散財して、同館か門前の炒飯を御馳走してくれる。(中略)七月の夏休みが近づくと、皆が言い合せたように頭髪を伸ばす。すっかり、国際的學生である。故郷へのお土産に硯、筆、扇子、紫檀細工と支那的のものを用意し、いそいそと帰省する。わずかに数ヶ月にしてすっかり支那通になりすまし、故郷の土地に静養すること二カ月、帰院すれば第一期の試験が待ちもうけている⁶¹。
- (23) (36 期) 書院に入つて真先に感心した事はその家族的な生活と大陸的豪華さについてであつた。学校では朝から晩迄支那語で鍛えられたが、これについても同県人の二年生が朝晩一生懸命復習してくれたし、夜は二階の寢室で、上級生から所謂楼上哲学の講義をうける⁶²。
- (24) (36 期) 佐原 一年生が来て一週間もすると「アーアー」と書院鴉が鳴き出すね(アーアーと支那語の四声の練習をすること)
- 田阪(三) こんな光景も天下一品だね。夕食後一時間半位、朝半時間位、二年生が一年生の相手をして音読の練習だからね。
- 原田 夕方二時間からかかってやっと読める様になっていても、その翌朝にはもう一人で読めないんだからね。
- 加藤 書院の支那語は正に天下一だよ。
- 浅山 そりゃ勿論だ。
- 今西 而も書院の支那語の試験と来たら「聞取り即訳」だからなあ、これで鍛えられるんだから我々もツライと言うわけだ⁶³。
- (25) (37 期) 泣かされた支那語の自習 四月から六月まで、雨が降ろうが風が吹こうが、書院カラスの鳴かぬ日はない。「ア、ア、ア、ア」「チ、チ、チ、チ」黄昏の院子に、次第に人影はまばらになつて行く、あせればあせるほど舌がまわらない。「shih shih」ちがう、「もう一遍」「shih shih」「だめだめ」ようやくお許しが出て、ホールで飲むレモン・テイの美味さよ! 書院出の中国語が、他の追隨を許さぬのも宜なる哉、きたえかたがちがうのだ⁶⁴。
- (26) (38・39 期) 書院生活で何がウマかつたかといえば、支那語を読んだ後のレモン・ティー、夜食の炒麵、炒肉片ぐらいウマかつたものはないように思う。夕食後、先輩の後について支那語をよみ、喉候がカサカサになつた後の

⁵⁹ 30 期生「虹橋路歳時記」、『東亜同文書院大学史』1982 年版、548 頁。佐藤恭彦・藤田佳久 2017 年、183~186 頁に再録。

⁶⁰ 済木健次、室屋光義「第三十二期生回想録」、『東亜同文書院大学史』1955 年版、258~260 頁。

⁶¹ 高橋五三「第三十三期生回顧録」、『東亜同文書院大学史』1955 年版、262~263 頁。

⁶² 松野稔、樹野阪治、井唯信彦「第三十六期生回想録」、『東亜同文書院大学史』1955 年版、272 頁。

⁶³ 原田豊作ほか 1939、175 頁。いま藤田佳久 2001、29 頁により引用。

⁶⁴ 柳内滋「第三十七期生史」、『東亜同文書院大学史』1955 年版、276 頁。

レモン・テーは正に甘露だった⁶⁵。

- (27) (41期) そのうち「華語萃編」初級科の講義が進み、「アー、アア、アーア、ア」が「剛才来的是甚麼人？他就是吳其仁先生」あたりになると、もはや、みんなの顔つきが悲壮になり、夜な夜な院子の電柱のかげで、声涙ともに下る同志たちの絶叫が聞かれるようになった⁶⁶。
- (28) (41期) 書院の発音指導ということで思い出すのは、「書院ガラス」です。「カラス」と言っても鳥ではないんですね。書院では入学しますとまず各自が1年上の同県人の先輩に付きまして、朝食前約1時間、夕食後約1時間(1時間を越えることが多かったですけど)、マン・ツー・マンで発音の指導を受けるということになっておりました。音読指導と言いましても最初の頃はやっぱり発声練習から始まるわけでございますから、先輩のあとに付いて「アア、アア、アア、アア」とか、「カア、カア、カア、カア」とかいうようなことを声張り上げてあちこちで言うもんですから、カラスが鳴いているように感じたわけでしょうね。それで「書院ガラス」というように名づけられたわけございまして、書院の春の風物詩にもなっておりました。書院は全寮制をとっておりましたから、できたのであろうと思いますが、ほぼこの状態が前期の秋の試験が終わる頃まで続いたと思います。これは発音指導もさることながら書院生としての一体感とか、そういったものを養っていったというように感じております。この先輩に付いて朝食前に1時間、夕食後に1時間、大きな声を出して読むというのが習慣になりました。先輩から離れても自分で「華語萃編」とかその他のテキストを片手にして読みながら、我々が「ユアンズ(院子)(庭ですわね)」と呼んでいたキャンパス内を歩き回っている、そういう光景があちこちに見られたものであります。誰がどの新入生を指導するかは、学生の間で組織されておりました県人会でだいたい決めていたようです。(中略) その方がちょうど明日から授業が始まるという前の日に部屋を訪ねてきてくださりまして、「明日から始めるぞ。朝起きたら俺の部屋へ来い。寝坊していたら遠慮せずに叩き起こせ」というように言ってくださいました。埼玉ご出身の方で、これが明日から私を教えてくださいださる兄さんかと思ってとても頼もしく感じたものでございます。昨年ですか、お亡くなりになりましたけれども、発音の大変きれいな方でございました。中国語にはそり舌音とか、「リ(日)」という巻き舌音ですね、パッと息を出す音、日本語ではたとえば「タタミ」と言う場合に2番目の「タ」はちよつと息が出る、あれよりもっと強い息が出る音がございまして、それがなかなか出ないんですが、根気よくいやな顔ひとつせず教えてくださいました。のみならず土曜日・日曜日には街へ連れ出している案内したりご馳走してくださるなど、本当に兄以上の存在でございました。予科を修了する時に学校から褒賞されました。トップが今そこに座っておられる下村君で、私は3席だったと思うんですけど、その先輩は非常に喜んでくださいました。そのお顔が今も目の前に彷彿として浮かんで参ります。終戦後は絶えてお会いすることはございませんでしたけれども、ちょうど中国の文化大革命が終わった頃ですから、1978年かそこらだったと思いますが、大阪でお会いすることができました。その時「お前のテレビの中国語講座をずっと見てるよ。お前もうまくなったものだな」と、初めてお褒めをいただきました。その頃私はもう17歳の少年ではなくて50代後半で、髪にボツボツ白いものが交じろうとしている頃でございまして、その歳になってやっと合格点をいただいたわけでございます。誰からいただくよりも嬉しい合格点でございました⁶⁷。
- (29) (41期) 入門時には発音と言うよりも発声練習、これに相当の時間をかけまして、いつまで経っても「アア、アア」とばかりやっております、この調子ではいつになったら中国語を教わるのだろうかというような思いをしたものでございます。しかもそれが教場(教室)だけではないんですね。授業が終わって部屋に帰る。そこで先輩にこごかれるわけです。先ほど井上先生も「書院がらす」ということで紹介されておりましたけれども、どう

⁶⁵ 加治屋淑郎「最後の書院学生(第三十八・三十九期生史)」、『東亜同文書院大学史』1955年版、282頁。

⁶⁶ 下村行正「第四十一期生回想録」、『東亜同文書院大学史』1955年版、287頁；1982年版、613頁。

⁶⁷ 宮田一郎2010、163～164頁。

ということかと申しますと、書院では入学してからほぼ1年ほどのあいだ先輩に付きまして、その日習った課の音読の特訓を受けるわけです。夕食後1時間、それから翌日朝食前1時間、特訓と言うよりもしごきですかね。そういうものを受けるわけなんです。先輩もかわいがってくれたと言うか、ちょうど相撲取りが後輩をかわがるようなもので、時にまあ「しごかれた」というような印象の残るものもたくさんございました。だいたい同じ県の1期上の先輩に習うのが普通でございましたが、私は先輩に福井県出身者がおらなかったので、埼玉県の方の1期上の方にしごいていただきました。大変厳しく、そして非常に丁寧に教えていただきました。舌の位置とか反り方など、指を突っ込まんばかりの教え方でありました。忘れられない思い出でございます。しかしこれは、そういった後輩の指導をする先輩にとっても、同時に再学習の好機になったわけですね。それによって自分の中国語を点検し、基礎を再構築することができたと思います。これは自分が後輩を持って指導するようになって痛感いたしました。(中略) ちょっと話が前後しますが、発音訓練は耳の聴覚訓練でもあります。発音をやかましく言うということは、聞く耳の養成にもつながっておったように考えております。しかし日本の今の中国語教育では、私もそうでしたけれども、あまり発音練習に時間を取らずに、ニーハオとかシェーシェーとかツァイチェンとか、そういうことをどんどん教えていく。まあ学生もそれを喜び、いつまでも「アア、アア」なんて言ったら、学校やめちゃいますから妥協してるわけでしょう。私が中国語を教え始めた頃、先輩の教授に「お前そんなに馬鹿みたいに、このアはいかんとかこのイはいかんとか、そんなにやかましく言うのはよせ。音韻論的に許容される範囲ならまあまあでいけ。そして先に進め。学生の発音は徐々に直していったらいい」ということを言われました。その意味はだいたい私にも分かりましたけれども、今の新制大学の教養課程の中国語教育と、われわれ書院の中国語教育とは違うんだなあ、ということを痛切に感じたものでございます⁶⁸。

- (30) (42期) 上級生は朝晩庭で、われわれ中国語のできない新生を呼んで、中国語の発音を教えてくれるんです。これが「アー、アー、アー、アー」ときこえるので「書院カラス」と言いました。それから下級生は食堂のテーブルの端に座って上級生の飯つきをする。長いテーブルに6人ぐらい座るわけですね。端の下級生が上級生に飯をついだり、汁をよそう。そういう生活です。われわれは全員部活動に入りました。ですから教室の中では無い親近感が、そういう部活動で生まれたわけです。教授達の人間的な触れ合いというのも昼間の教室の中だけじゃなしに、夜なんかは部屋に呼んでくれます。教授も同じ学内に住んでますから、誰でも出てこいと。行くとちょっと酒を出してくれるわけですね。ウイスキーを紅茶の中へ入れたりして、濃いのか薄いのかというような調子で飲ましてくれる⁶⁹。
- (31) (42期) ありがたかったのは、上級生が朝夕院子(庭)で中国語の発音を教えてくれたり、街案内をして食事に誘ってくれたりすることでした。質朴剛健の気風の中で、上級生が下級生の面倒を見、下級生が上級生に礼を尽くす全寮生活、部(運動部)活動の中で生まれる親近感、教室内だけでない教授たちとの人間的触れ合い(家庭訪問)、中国全土にまたがる先輩後輩の家族的関係等、暖かくよき伝統の中で、我々の夢多き青春生活は忘れ難い貴重なものとして育まれました。旅行、運動会、演芸会、好的会、部会、県人会、先輩訪問等々思い出は尽きません。学徒動員(出陣)のため、我々の書院生活は短縮されてしまいましたが、書院生活が我々の人格に与えた影響は強く大きかったです⁷⁰。
- (32) (42期) 新生が寮に入ると、一年上の上級生が夕方、中国語の四声を初めとする発音指導を夕食迄散歩しながらやってくれる習慣になっており、また彼らが自費で後輩達を上海の街に案内し、中国人との接し方を色々教えてくれたのであった。そして勉強していると、教育のためであろう、每晚酒を提げて酔っ払った先輩達が寮廻

⁶⁸ 宮田一郎 2012、80～81頁。

⁶⁹ 小崎昌業 2011、70頁。

⁷⁰ 小崎昌業 2014、58頁。

りと称して次々と現われ、新入生は酒の相手をさせられる。対応が悪いと机を引っくり返して怒鳴る。彼らの言うことを総括すれば「中国関係に一生を捧げようと思すなら、出世、金儲けは諦めよ。馬鹿になって中国に飛び込め。小手先の理屈は第二にして、酒でも飲んで馬鹿になる第一歩を踏み出せ」と言うことであると解釈したが、その後、中国と深く関わるにつれ、先輩達が伝統として残したであろうこの様な考え方はなるほどと感ずることが多かったのである⁷¹。

(33) (43期) 予科生活の中心は語学と部の生活であつた。入学して間もなく朝食前の二時間に上級生に指導されて注音字母の発音より華語萃編の音読の練習である。樹間の鳥と大声を競つての発音練習により中国語の基礎を徹底的に鍛えられたのである。黙写及華語日訳はさながら実践的教授法であり、三回のリーディングによる答案の作成は尋常の勉強では追いつかぬものであつた。然しながら街に出れば練習の場があり、活きた会話となるので勉学にも自ら興味が湧き、街での買物、クリーニング、当舗子での交渉に用いる中国語が意外にスムーズに先方に諒解された時には、正に子供の如き喜びを感じたのである⁷²。

(34) (44期) 予科1年の頃の生活のテーマは、まず中国語の習得ばかりと云つてよいでしょう。これは厳しい。一週間で13時間の授業、それだけではないです。授業の成果を持ち帰ってその夕方、夕食前に1時間。それからあくる日朝食後に1時間。これを上級生の人につきまして、猛特訓の復習をするんですよ。この猛特訓がほんとうに猛特訓なんです。まず大きな声を出すんですね。中国語にイントネーションが4種類ある。アと平板な発声、これ第1声です。第2声が延ばすときに上へ上がる。第3声がアアと下げてから上げる。第4声がアと落とす。すべての文字にそれがついているんですよ。中国語の教科書は文字のひとつひとつに、この左下の隅が第1声、左上の隅が第2声、右上の隅が第3声、右下の隅が第4声と、丸がついてこの文字の4声はこれなんだという指定があるんですよ。教科書の言葉には、つまり文字に、みんなそれが付いているんですよ。しかし中国人に訊いても分かりませんよ。これ何声かと聞いても。彼らは全然意識せずにしゃべっていますから。この発音練習から基本的な単語習得。1週間で授業が13時間。寮に帰ってからあくる日まで2時間、ですから日に2、3時間以上はやってくるようになりますね。「それだけしか声が出ないか、それだけしか声が出ないか」と、上級生の叱声罵倒、ものすごいんです。そのうち、声がつぶれます。でも無理して声を出してうちに、人間、不思議なもので2週間もそれをやるといつの間にか声も戻りますね。何かこれは琉球三線やってくる人にも同じことを聞いた覚えがあります。その声も戻る2週間目ぐらいの頃からは、発音が一人前のものになったような気がします。同文書院の校庭に、庭にプラタナスの木がありましてね。そこにカラスがたくさん来てとまるんですよ。我々の発音練習のことを書院ガラスというニックネームがついてまして。予科1年の頃は普通の発音どころか、中国語の訓練だけでものすごいプレッシャーでありまして。何でこんな学校へ来たんだろうと思って1度は泣きました。泣いたのは自分だけかと思つたら同窓会で聞いたらみんな泣いたそうです。一度は、同文書院というところは商科の単科大学ですから理科系の人に来て全然面白くないわけです。私の同期に、県費制度【と】という、県費で大学を出られるという理由だけで来たものが途中で帰った者がいます。退学の状態です。1学期だけで2学期から出てこない者もいましたけど、中にはこの中国語で退学した者も、また自殺したのもいたんじゃないかと、私は思っております。そこでいじめられたといひますか、あれだけの訓練を受けて、3か月目には買い物ができるようになり、1年経てばある程度の会話ができるようになるわけです。私、自分たちを振り返ってみて、内地の学校で中国語をやつて、それで一人前になる人が不思議というか感心するほかはないと思っています。というのは、我々は先輩から鍛えられながら嫌だなあ、嫌だなあと思つているところへ先輩と一緒に街へ遊びに出るでしょ。すると町の人と先輩がペラペラとしゃべっているのを聞くと、ああ、やらなきゃならないなと。その繰り返しです

⁷¹ 西好隆 2010、33～34頁。

⁷² 藤原真吾「第四十三期生回想記」、『東亜同文書院大学史』1955年版、293～294頁；1982年版、629頁。

よ。内地ではそういう機会なんてないでしょ。にもかかわらず、あれだけ内地で本物の中国語を身に着けるといふ人の努力に感心致します。予科2年になって後輩を教えます。自分もこんなに下手だったかなと、みんな思っていたらしいです⁷³。

- (35) (45期) 月夜の晩などは日本内地への郷愁を誘うあの目もさめるような緑の芝生によって覆われた院子。フアイヤ・ストーム、運動会、スポーツ、或は書院カラスと奇名をとつた中国語の四声の練習など。書院生にとつては、各自思い思いに数多くの思い出を抱かせた院子。その数々の思い出を掻き消すように防空壕、蝸壺の出現によって無残にも打ちこわされてしまった⁷⁴。

参考文献

- 『東亜同文書院創立二十週年 根津院長遷厝祝賀紀念誌』上海東亜同文書院同窓会、1921年。
 『創立三十週年記念東亜同文書院誌』上海東亜同文書院、1930年。
 『創立四拾週年東亜同文書院記念誌』上海東亜同文書院大学、1940年。
 『東亜同文書院大学史』滬友会、1955年。
 『東亜同文書院大学史：創立八十周年記念誌』社団法人滬友会、1982年。
 愛知大学五十年史編集委員会編『大陸に生きて』風媒社、1998年。
 浅原達郎「尾崎雄二郎先生と一般教育」、『日古』8、2007年、pp.19-20。
 穴沢一寿「通訳従軍反対論者、野崎教授」、通訳従軍記編集委員会編『長江の水天をうち：江南に失われし刻を求めて：上海東亜同文書院大学第34期生通訳従軍記』財団法人滬友会内第34期生会、1993年、pp.181-197。
 石田卓生「東亜同文書院の中国語教育について」、『オープン・リサーチ・センター年報』4、2010年、pp.215-239。
 石田卓生「今泉潤太郎先生に聞く：愛知大学入学から中日大辞典編集処へ」、『日中語彙研究』7、2017年、pp.1-24。
 石田卓生『東亜同文書院の教育に関する多面的研究』不二出版、2019年。
 石田卓生「1937年に実施された東亜同文書院の中国語通訳従軍について」、『中国研究月報』76(4)、2022年4月、pp.1-16。
 今泉潤太郎「東亜同文書院における中国語教学：「華語萃編」を中心に」、『愛知大学国際問題研究所紀要』103、1995年、pp.1-25。
 今泉潤太郎述「「華語萃編」から見た同文書院の中国語教学」、『オープン・リサーチ・センター年報』1、2007年、pp.7-23。
 遠藤光暁『中国語のエッセンス』白帝社、2006年。
 大城立裕「朝、上海に立ちつくす：小説東亜同文書院」講談社、1983年；中公文庫、1988年。
 大城立裕「朝、上海に立ちつくす：小説東亜同文書院」、『大城立裕全集』第7巻、勉誠出版、2002年。
 大城立裕「書院文化史の願い」、『滬友』57、1988年、pp.37-41。
 大城立裕「私と東亜同文書院」、『同文書院記念報』21、2013年、pp.25-32。
 魚返善雄「三十三年華語夢」、『書報：中国図書雑誌』1巻(1958年5月号)、極東書店、1958年、pp.2-3。
 影山巍「思い出すこと」、庄子勇之助編『続・千山万里』滬友会・二八会、1970年、pp.17-21。
 鎌田政国「真島先生と赫司克而路校舍」、記念誌編集委員会編『瀕城に時は流れて』滬友会、1992年、pp.39-42。
 上尾龍介「那須さんの北京語：中国語の達人たち」、『中国文学論集』11、1982年、pp.7-20。
 小崎昌業「東亜同文書院（のち大学）と私」、『オープン・リサーチ・センター年報』5、2011年、pp.69-73。
 小崎昌業「東亜同文書院大学から外務省へ」、『同文書院記念報』22、2014年、pp.57-66。
 奥水優著、氷野善寛・紅粉芳恵編『中国語と私：学び、教え、究める、中国語に生きる』好文出版、

⁷³ 大城立裕 2013、26～27頁。

⁷⁴ 長沢源夫「最後の学生（第四十五期生の想出）」、『東亜同文書院大学史』1955年版、300頁。

2021年。

- 小南一郎、高田時雄、木田章義、平田昌司、森賀一恵「先学を語る 尾崎雄二郎先生」、『東方学』144、2022年、pp.96-130。
- 斎藤兆史『英語達人塾』中公新書、2003年。
- 坂本一郎「中国語学習の体験」、『中国語学』71、1958年2月、pp.6-10、12。
- 佐藤晴彦「飲水思源：中国語教育の開拓者5 坂本一郎先生(1)」、『中国語の環』82、2009年、pp.4-5。
- 佐藤恭彦・藤田佳久編『日本人学徒たちの上海：上海日本人学校生と東亜同文書院生』あるむ、2017年。
- 三宝政美「野崎駿平先生との思い出」、『トンシユエ』12、1996年；『トンシユエ総輯号』同学社、2001年、pp.286-288。
- 幣原喜重郎『外交五十年』読売新聞社、1951年；中公文庫、1987年；2015年。
- 朱牟田夏雄「朱牟田夏雄教授略年譜・主要著書目録」、『中央大学文学部紀要』83（文学部第40号）、1977年、pp.165-170。
- 朱牟田夏雄『翻訳の常識：読解力から翻訳力へ』八潮出版社、1979年。
- シュリーマン、H、池内紀訳『古代への情熱』小学館、1995年。
- シュリーマン、村田数之亮訳『古代への情熱』岩波文庫、1954年；2007年。
- 庄子勇之助編『続・千山万里』滬友会・二八会、1970年。
- 庄子勇之助編『続々千山万里』滬友会・二八会、1976年。
- 庄子勇之助『千山万里の旅』丸誠、1986年。
- 菅野俊作「東北大学の故野崎駿平教授：書院系教授の古武士的偉材」、『滬友』50、1983年、pp.35-38。
- 竹内好「東亜同文会と東亜同文書院」、『日本とアジア』ちくま学芸文庫、1993年、pp.419-441。
- 塚本照和「怒られて、ご馳走になった思い出」、『トンシユエ』3、同学社、1992年；『トンシユエ総輯号』同学社、2001年、pp.72-75。
- 辻野裕紀「言語教育に伏流する原理論的問題：功利性を超えて」、『言語文化論究』37、2016年、pp.1-19。
- 東亜同文書院『華語萃編 初集』1921年4版（九州大学附属図書館蔵）；1931年9版（京都産業大学図書館蔵、京都女子大学図書館蔵）；1942年全訂版（小樽商科大学附属図書館蔵）。
- 東亜同文書院華語研究会「第一學期華語試験問題並譯例」、『華語月刊』22、1932年7月、pp.37-40。
- 戸田七支「志村学校の思い出」、刊行委員会編『白雲遙遙：回想の志村良治』、2005年、pp.308-310。
- 永野賀成「中国語で卒業答辞」、記念誌編集委員会編『滬城に時は流れて』滬友会、1992年、pp.42-44。
- 西英昭「東亜同文書院と中国法学：その教授陣と著作群」、『法政研究』88(1)、2021年、pp.389-440。
- 西好隆「わが青春の悩みと立志」、『同文書院記念報』18、2010年、pp.22-59。
- 西所正道『上海東亜同文書院 風雲録：日中共存を追い続けた5000人のエリートたち』角川書店、2001年。
- 「白雲遙遙：回想の志村良治」刊行委員会編『白雲遙遙：回想の志村良治』同刊行委員会、2005年。
- 原田豊作以下16名「東亜同文書院欧文社会友座談会記『同文書院とその生活を語る』：昭和一四年一月」、『受験旬報』欧文社、1939年2月中旬号。
- 藤田佳久「東亜同文書院卒業生の軌跡：東亜同文書院卒業生へのアンケート調査から」、『同文書院記念報』9、2001年、pp.1-71。
- 藤田佳久『日中に懸ける：東亜同文書院の群像』中日新聞社、2012年。
- 藤田佳久『東亜同文書院卒業生の軌跡を追う』あるむ、2020年。
- 紅粉芳恵『華語萃編』に関する研究ノート：東亜同文書院中国語教材の宝典的定本』、『アジア文化交流研究』5、2010年、pp.277-290。
- 紅粉芳恵・氷野善寛編『中国語、恩師、そして神戸』好文出版、2017年。
- 松岡恭一・山口昇編『日清貿易研究所・東亜同文書院 沿革史』東亜同文書院学友会、1908年。
- 松澤信祐「故志村良治先生へのお詫びとお礼」、『白雲遙遙：回想の志村良治』、2005年、pp.280-281。
- 松田かの子「官話教科書『華語萃編』の成立に関する一考察」、『藝文研究』80、2001年、pp.178-194。
- 松田かの子『華語月刊』と東亜同文書院の中国語教育』、『藝文研究』88、2005年、pp.154-166。
- 宮田一郎「東亜同文書院大学の教育、とくに中国語教育について」、『オープン・リサーチ・センター

年報』4、2010年、pp.159-176。

宮田一郎「東亜同文書院の中国語教育と私」、『同文書院記念報』20、2012年、pp.79-88。

宮田一郎「大衆の中で大衆に学ぶ：母校・東亜同文書院を回顧する」、『同文書院記念報』24、2016年、pp.199-206。

山本隆『東亜同文書院生』河出書房新社、1977年。

林麗婷「留学という幻影：大城立裕『朝、上海に立ちつくす』をめぐる」、『中日近代文学における留学生表象』日中言語文化出版社、2019年、pp.144-172。

六角恒廣『近代日本の中国語教育』不二出版、1984年。

六角恒廣「東亜同文書院の中国語教育」、『早稲田商学』318、1986年、pp.155-191。

六角恒廣『中国語教育史の研究』東方書店、1988年。

六角恒廣編『中国語教本類集成』第2集第2巻、『華語萃編』初集～四集、不二出版、1992年。

謝 辞

本稿執筆にあたり、霞山会の倉持由美子氏、甲斐勝二・福岡大教授、手代木有児・福島大教授、塚本信也・東北学院大教授より関連資料をご恵贈いただいた。三宝政美・富山大名誉教授、橋本草子・京都女子大名誉教授、佐藤昭・北九州市立大名誉教授、佐竹保子・大東文化大特任教授（東北大名誉教授）、伊原大策・筑波大名誉教授には、東北大の野崎駿平、志村良治両先生の授業についてご教示を賜った。阿部兼也先生については、佐竹保子、手代木有児、塩旗伸一郎（駒澤大）、中野知洋（大阪教育大）、齋藤智寛（東北大）、高戸聡（福岡女学院大）の諸氏に確認した。神戸市外国語大学の現況については、竹越孝・同教授にご教示いただいた。記して感謝申し上げます。

本稿の骨子は、第319回中国文藝座談会（2022年7月16日、九州大学）で「東亜同文書院の伝統的教授法「念書」について」と題して口頭発表した。

本研究はJSPS 科研費 21K00328 の助成を受けたものです。

(九州大学言語文化研究院教授)